

Obituary of the Late Mr. Jyunnosuke ŌHARA

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Serizawa, Shunsuke メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00056117

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



い。前二者は愛媛県に自生が有るとしているが、山本 (1978) はタムシバの誤認情報に基づいているとみなしている。なお、コブシが豊富に自生し逆にタムシバは自生しない関東の平野部を除き、四国だけでなく本州でも、筆者の知る限り、タムシバはコブシと呼ばれることが多い。コブシモドキがコブシの

単なる異常個体か、もともとは沢山あったものの生残りかは今のところ何も言えない。新たな個体が発見されることを切望している。なお、阿部、赤沢両氏とも相談の上、同時に与えられた二つの和名の内コブシモドキを採用した。

(Received Dec. 25, 1985)

○ 松林文作さんを偲ぶ (城戸正幸) Masauki KIDO: Obituary of the Late Mr. Bunsaku MATSU-BAYASHI

昭和 37 年 12 月 28 日、倉田先生をお迎えして紫尾山麓登尾から観音滝經由山頂を目指したとき、ユニークな長靴姿で参加した松林さんを、今でもはっきり思い出します。

彼は、第 2 回九州支部宮之城大会から参加し、昭和 44 年には長崎県が当番を勤め、松林さんのお世話で、多良岳を採集しました。幸い営林署の会員が 2 人も参加なさったので安心していただけるところ、途中で道に迷い真暗くなって宿につき、夕食にも間にあわず大変でした。これも今になってみれば、なつかしい思い出となりました。その後、大会には熱心に参加し、みんなから、文作さん、文作さんといって親しまれていました。彼はどちらかといえば黙々と採集し、多くを語らない方であつたように思われました。その間、力を内にたくわえられていたものと思います。

昭和 56 年には長崎県シダ植物誌を集大成なさるといふ大事業を美事に成し遂げられました。この偉大なる快挙に対して適度の敬意を表します。ところが、昭和 57 年、川内・串木野両市にまたがる冠岳で大会をもったとき、参加申込みをしながら姿を見せず、文作さんのことだから、ひょっこり姿をみせるでしょうと期待していたのですが、ついに姿を現わしませんでした。昭和 58 年、南薩開聞岳での会にも姿をみせず、案じていたところ、昭和 59 年元旦には、『いろいろありましたが元気になりました。』という賀状をいただき嬉しくしました。しかし、その年の 12 月、奥様からの訃報に接し撫然といたしました。

いろいろな意味でユニークな存在だった松林文作さん、日本のシダ植物図鑑出版のため長崎県委員として献身的に努力して下さったご功績を思い謹んで哀悼の意を表します。

(〒 899-01 出水市沙見町 5887-1, Shiomi-machi 5887-1, Izumi-shi, Kagoshima prefecture 899-01)

(Received Jan. 24, 1986)

○ 大原準之助氏を悼む (芹沢俊介) Shunsuke SERIZAWA: Obituary of the Late Mr. Jyunnosuke OHARA

本会会員で愛知県岡崎市にお住まいの大原準之助氏は、脳出血のため、昨年 12 月 20 日、療養先の四国で亡くなられた。まだ 55 才であつた。氏は、愛知県やその周辺を克明に歩かれ、多くの市町村の植物誌を執筆され、更に愛知植物研究会の代表幹事として同好者のリーダー的存在でもあつただけに、私達にとって大きな衝撃であつた。

実は、私が大原氏とお会したのは、僅か 2 回だけである。最初は昨年春に私の大学に訪ねてこられた時で、その時の主な用件は新品種をいくつか記載したいので基準標本を保管してほしいというものであつた (それらの新品種は、本誌前号に発表された)。その際他の話もいろいろ出たが、氏の愛知県やその周辺のフロラの解明にける情熱というか執念というか、それには全く圧倒される思いであつた。その後、体調がよくないので入院するという連絡があり、一度お見舞いに伺ったが、その時も退院したら、あれをまとめた、これを書きたいと山積みの計画を話しておられた。私も今まで愛知県のフロラの調査には不熱心であつたが、大原氏におかれてついお手伝いしましょうと言ってしまい、また実際その気になりかけていただけたに、肝心の氏を失い、何とも残念でならない。

なお大原氏の遺された標本は、一括して愛知教育大学に寄贈していただく方向で話が進められている。もしそうならば、なるべく早く整理し、愛知県のフロラの研究のための基礎資料として多くの人に利用していただきたいと考えている。故人もきっとそれを望んでいることであろう。

(愛知教育大学生物学教室, Department of Biology, Aichi Kyoiku University, Kariya-shi, Aichi 448)

(Received Mar. 15, 1986)